

玲央 meets Marshall CODE 50



無限のポテンシャルを持つ最新デジタル・アンプとの邂逅

様々なアンプのモデリング・サウンド、膨大なプリセット音色と多数のエフェクト、アプリとも連動できる高い操作性。ギタリストが昨今のデジタル・アンプに求める機能は実に多いが、そうしたあらゆる希望にもれなく応えてくれるマーシャルのCODEシリーズを本コーナーでは紹介しよう。今回は、発売当初からプロ／アマを問わずに高い評価を得ているこのシリーズの真価を確かめるため、永らくマーシャル・アンプを愛用しているlynch.の玲央にCODE 50と対峙してもらった。

製品の問い合わせ先／ヤマハミュージックジャパンお客様コミュニケーションセンター ギター・ドラムご相談窓口
[0570-056-808 (ナビダイヤル)] <http://www.marshallamps.jp/>

“音の速さ”を追求していくようになり
マーシャルが理想的だと気付いた

——マーシャルの存在を初めて知ったのは、いつ頃のことでしたか？

玲央：バンドを始めて、スタジオに入るようになった頃ですね。どのスタジオにも必ずマーシャルのJCM800か900が置いてあったから、当時は“スタンダードなスタジオ常設アンプ”というくらいの認識で。つまり、マーシャルのスゴさがまだ分かっていませんでした。その後いろんなアンプを使ってきたんですけど、lynch.でメジャー・デビューした際に、テクニシャンの方から「ピッキングに対するレスポンスの速さが、ギターの音色作りではマストだ」というアドバイスを受けたんです。僕はそれまで音のレイテンシー（信号の処理に伴う発音の遅れ）をそこまで気にしていなかったから、本当に衝撃的で。それから“音の速さ”を追求していくようになり、マーシャルが理想的なアンプだということに気付いて、マーシャルのスゴさを改めてしっかりと理解できたんです。で、マーシャルのいろんなモデルを試してみて、最終的に1959に辿り着きました。

——1959は音の立ち上がりが速い上に、ごまかしが効かないので、弾くのが大変なアンプだとも言えますよね。

玲央：確かにそうですね。自分の下手さが全部出てしまいます(笑)。でもそれって、“自分自身の技量が試されるアンプ”でもあるということじゃないですか。そういうところも気に入ったんです。それで、状態の良い1959を探していく中で出会ったのが今所有している白い1959なんですよ。lynch.はチューニングが2音半下げ、もしくは3音下げがスタンダードなので、それをビンテージ・アンプで鳴らしたときに果たしてどうなのかという心配もあったんですけど、1959は音圧があるし、音が速いし、どんなことを弾いているのが全部見えるという素晴らしい1台でした。

——ただ、1959はそれほど強く歪むタイプのアンプではないですよね？

玲央：はい。なので、オーバードライブを足下に置いて、ブースターとして使っています。ディストーションじゃなくて、オーバードライブを使っているというのもこだわりで。lynch.のCDを聴いたり、ライブを観たりした人は、すごく歪んでいるように感じるかもしれないけど、実音はあまり歪んでいないんですよ。右手のピッキングとバンドのアンサンブルで、歪んでいるように聞こえるんです。僕はそれが1番の正解だと確信しています。

——同感です。では、マーシャルのデジタル・アンプにはどんな印象を持っていますか？

玲央：正直、マーシャルのデジタル・アンプはまだ触ったことがないんです。なので、この取材に向けてCODEのデモ動画を観たんですけど、スゴく良い音ですよ。自分でもああいう音が出せるのかどうかを楽しみにしてしまいました。



CODE 50 ¥Open Price

CODEは、プラグイン・ソフトウェアやハードウェアを多数輩出しているスウェーデン発のブランド：ソフチューブ社と、マーシャルが共同開発した“マーシャル・ソフチューブ・テクノロジー”（以下、MST）を採用したデジタル・アンプ。このMSTによる14種類のプリ・アンプ、4種類のパワー・アンプ、8種類のスピーカー・キャビネットのモデリング・サウンドは、マーシャル歴代の名機をはじめとする数々のアンプを驚異のクオリティーで再現している。

また、“Gateway”という無償のアプリをスマホなどにインストールすると、より細かく直感的に音作りをすることができる。さらに、CODE専用の無料クラウド・サービス“My Marshall”に登録すると、“Gateway”を経由してオリジナル・プリセット音色のダウンロードやエディットなども行える。



▲上質なアンプ・モデリングに加え、24種類のデジタル・エフェクトや実践的な100種類のプリセットが搭載されている点にも注目。視認性の高いディスプレイとつまみで操作できることはもちろんだが、Gatewayでより直感的に音を作り込むことも可能だ。

Specification

Control : PRESET , EDIT , MASTER , VOLUME , TREBLE , MIDDLE , BASS , GAIN , PRE FX , AMP , MOD , DEL , REV , POWER , CAB , EXIT / STORE /
Pre Amp Models:14 / Power Amp Models:4 / Speaker Cabinet Models:8 / FX Models:24 /
Input / Output:INPUT , FOOT SWITCH , HEADPHONE , AUDIO , USB /
Output Power:50W / Size:530mm (W) ×440mm (H) ×280mm (D)



玲央はCODE 50をどう見たのか？

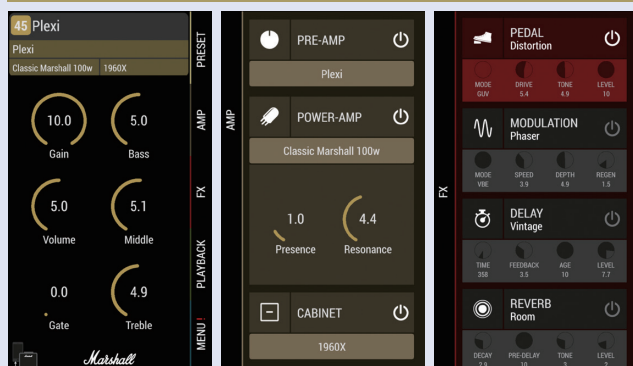
「まず、スゴくリアルな音で驚きました。僕、歴代のマーシャルはほぼ全機種を弾いたことがあって、各モデルの音を熟知しているつもりなんですけど、本当に再現度が高い。特に1959のサウンドは、レスポンスの速さやサステインの伸び方とかまで忠実で、僕が持っている

1959とほとんど遜色ありません。状態の良いマーシャルはこういう音なんですよ。スタジオにあるアンプって、長い間使われ続けているからヘタっているモノも多いじゃないですか。だから、普段スタジオでマーシャルに触れている人こそ、このアンプを使ってみたい欲しいです。

マーシャル・アンプの本当の良さや魅力を実感できますよ。

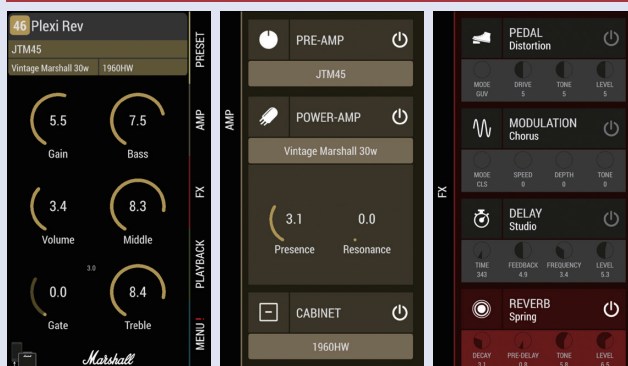
Gatewayは直感的に音作りができて、すごく使いやすい。画面も分かりやすく、未経験者でもすぐに使えると思います。僕も初めて触りましたが、まったく問題なかったです」(玲央)

Reo's Standard Backing Tone



「僕の基本的なバックিং・トーンをシミュレートしました。プリ・アンプはプレキシで、キャビネットは1960X。それに、ガバナーで歪みを補っています。あとは僕と同じように、ピッキングのニュアンスで歪みの具合を調整してみてください」(玲央)

Reo's Recommended Clean Tone



「JTM45(プリ・アンプ)と1960のハンドワイヤード・キャビネットを使ったクリーン・トーン。この音は最高(笑)。CODEは、ビンビンいうところが若干混ざったマーシャルならではの質感や、ビンテージらしい温かみも簡単に出して、本当に驚きました」(玲央)